



## 令和 7 年度 前期学校評価アンケート結果報告

### 1 実施期間

令和 7 年 9 月 1 日～9 月 12 日

### 2 対象

保護者 (小学部、中学部、高等部)

児童生徒 (小学部、中学部、高等部)

教職員 (管理職を除く全教職員)

### 3 実施方法

○保護者 ····· 各項目について「実現度」を 5 段階で回答

紙媒体もしくはアンケートフォームより回答

○児童生徒 ····· 各項目について「実現度」を 3 段階で回答

紙媒体もしくはアンケートフォームより回答

○教職員 ····· 各項目について「実現度」を 5 段階で回答

アンケートフォームより回答

### 4 回答数 (率)

	保護者 230	児童生徒 237	教職員 165
R7 前期	161 (70%)	64 (27%)	160 (97%)
R6 前期/後期	67%/64%	25%/34%	93%/98%

※保護者数は、兄弟姉妹等の重複を除く家庭数で示す

※R6 前期/後期については、回答率のみ示す

#### 【回答方法について】

昨年度より、保護者アンケートの回答方法として紙媒体を復活させた。今年度も同様に紙での回答を受け付けた結果、回答者の約 25% が紙媒体による回答であった。また、昨年度に引き続き、アンケートフォームによる回答方法として、紙媒体に QR コードを記載し、保護者自身の端末から読み込む方法と、保護者連絡ツール「すぐーる」にアンケートフォームの URL を配信した。このように、複数の回答方法を提示したことでも回答率の向上につながったと考えられる。さらに、回答期間中に「すぐーる」を通じて再度回答依頼を配信したことでも、保護者の回答を促す上で効果的であった。

## 5 アンケート項目について

「令和7年度京都市立吳竹総合支援学校グランドデザイン（※下記参照）」に基づき、選択形式と自由記述でアンケートを作成した。

### 研究テーマ（2年次）

「ウェルビーイングな学校を目指して」

～新たな、自由な発想での授業研究を通して、児童生徒の

「やってみたい」「なんとかなる」「ありがとう」「自分らしく」の姿を引き出す

学校教育目標である「社会参加し、自分らしく生き生きと活動したいという児童生徒の願いの実現」を目指し、大切にしたい言葉「やってみたい」「ありがとう」「なんとかなる」「自分らしく」の視点で授業を見つめ直すことで、より魅力的な授業実践につながるのではないかという仮説のもと研究（2年次）にも引き続き取り組んでいる。今年度はその成果をより広く共有し、また教職員自身の振り返りや今後の実践にもつなげていけるよう、研究発表会を2月に開催予定である。

本校は、児童生徒数の増加に伴う教室不足の解消および校舎の老朽化への対応として、令和2年度より校舎の全面建替え工事を進めており、埋蔵文化財発掘調査を経て、令和7年10月からは第2期工事に移行し、令和9年3月の完成を目指している。

また、今年度からは新たに「地域協働プロジェクト」「地域支援プロジェクト」を発足させ、地域との連携を一層強化していくよう取り組んでいる。活動場所の確保等ハード面の課題はあるものの、校舎完成を見据え、吳竹の子どもたちの強みを生かし、地域とともに成長できる学校づくりを目指していく。

令和7年度 京都市立吳竹総合支援学校 グランドデザイン  
吳竹総合支援学校再構築（令和8年度未完成）に向けた

### 「吳竹バルーン構想」Ⅱ

～くれたけから新しい風を～

学校教育目標  
社会参加し、自分らしく生き生きと活動したいという児童生徒の願いを実現する  
大切にしたい4つの因子  
「やってみたい」「ありがとう」「なんとかなる」「自分らしく」

学校運営の指針

- 子どもが教職員も含め育つウェルビーイングな学校
- 危機管理を徹底し、子どものいのち・人権を守りきる
- 専門性の向上・維持を図り、地域社会での役割を果たす

令和7年度重点的取組

- 地域協働プロジェクト、地域支援プロジェクト、研究推進委員会を中心に、  
学校・地域・社会が一体となった共生社会の基盤となる学校づくりを行う  
<目標1> 授業の創意工夫や改善を図り、魅力ある教育の実践と希望を行う  
●子どもの想いや夢に丁寧に受け止め、社会性や人と関わっていく力を育む  
●子どもの可能性を広げ、生活を豊かにするための手段として、情報端末等を適切、かつ効かしく活用する  
●子どもが学び、何ができるようになったのか、学んだことが何につながるのかを評価し、授業改善を行う  
<目標2> 地域連携、地域支援の充実を図る  
●センター機能を強化し、地域の学校園、施設等への支援の充実を図る  
●ライフケアフリマーケット等での学習を通じて、共生社会の実現に向けた取組を進める  
●地域で取組を果たす取組や交流及び共同学年の充実を図る  
<目標3> 活発な研究活動を通して働きかける力を高める  
●授業者や生徒の主体的・活発な授業研究を通して、より良い授業づくり  
<目標4> 働きやすさを追求し続ける（業務改善と環境整備、学校を美しく）  
●業務改善案を積極的に提案、検討し、組織的・効率的な業務の見直しを図る  
●職員間のコミュニケーションの活性化を図り、風通しの良い職場、心理的安全性の高い職場をつくる

吳竹の強み

- 多様な文化を受け入れる柔軟性や寛容性
- 子どもの自由で多様な表現活動
- ICT活用、芸術系活動、余暇活動の充実など先進的な取組、ユニークな取組
- 迅速な行動力
- 学部を超えた児童生徒のかかわり
- 行事に向かうパワー
- ・学校祭（体育の部・文化の部）等の行事に  
向けての取組

### めざす

#### めざす児童生徒像

- 自分の心や体を大切にする
- 人を大切にし、共に生きてる
- 意欲や関心を持って主体的に活動する
- 自分の想いや夢を伝えようとする
- 願いや夢に向かってますむ
- 役割を担い、役に立とうとする
- 自分から挑戦をする
- ルールや約束を守る

#### めざす教職員像

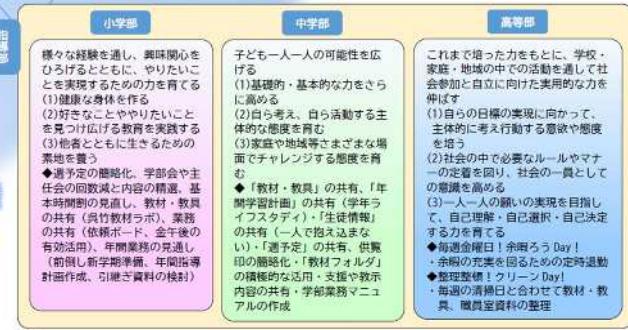
- 児童生徒の健康・安全を守る
- 児童生徒を愛し、児童生徒の人権を大切にする
- 児童生徒の主体性を尊重する
- 授業を大切にし、意欲をもって、児童生徒を教育する
- 自らの専門性向上をめざして日々精進する
- 保護者や地域と連携し、他の教職員と協力しながら仕事をする
- ライフ・ワークバランスを実践する

#### めざす学校像

- 生命を守り切る学校
- 児童生徒の学びを大切にする学校
- 信頼される学校（保護者や地域との信頼関係を基にした、安心・安全で開かれた学校）
- 子どもや保護者、地域に夢や希望を与える学校
- 心理的安全性が高く、一人一人の力が発揮できる学校

#### 共生社会の実現・ 自立と社会参加

令和7年度各部の目標（取組の重点）



### 推進する 風を

### 起きす 風を

### 児童生徒 保護者

### 教職員 地域

### 振り返る 風を

### 幸せの風

つながる力・  
発信する力

## 6-1 実現度に関する分析結果 [保護者、教職員]

保護者（各部/全体）、教職員のアンケート結果より、肯定的な選択項目となる「よくできている」「大体よくできている」の回答を合わせた割合（%）を示す。

質問項目	実現度（%）				
	上段が R6 前期/後期、下段が R7 前期				教職員
	保護者 (小)	保護者 (中)	保護者 (高)	保護者 (全)	
1.学校は、子どもたちの思いや反応をていねいに受け止められている	98/98 98	97/98 91	95/94 98	97/96 97	96/99 99
2.学校は、子どもたちがいろいろな人と関わって活動できるように取り組んでいる	92/96 98	100/97 94	97/98 97	96/97 96	96/97 95
3.学校は、子どもたちが「やってみたい」と思える学習に取り組んでいる	92/98 92	89/92 82	90/88 91	90/93 89	93/93 95
4.学校は、子どもたちが自分なりの方法で思いや考えを伝えられるように取り組んでいる	92/100 98	92/92 91	96/92 94	93/95 95	98/96 93
5.学校は、子どもたちの願いや目指す姿を本人や保護者と共有している	98/94 96	97/95 88	95/94 94	97/94 93	93/90 90
6.学校は、子どもたちが役割を担い、やりがいを感じて活動できるように取り組んでいる	96/96 93	95/94 88	91/94 93	94/95 92	96/98 96
7.子どもたちは、自分なりの挨拶（発声、会釈、瞬き等の反応など）を実践できている	94/93 87	94/94 94	87/92 94	92/93 91	97/97 98
8.学校は、子どもたちがルールや約束を守ることの大切さを学べるように取り組んでいる	96/92 91	92/97 93	96/92 96	95/93 93	93/95 96
9.学校は、お便りやホームページなどを通して日々の教育活動を発信できている	98/95 100	100/98 94	95/92 94	98/94 95	90/91 90
10.学校は、外部関係機関や地域との連携を大切にしている	86/95 87	86/87 80	80/78 83	84/88 84	87/89 91
11.学校は、子どもたちが安心・安全に学べる場となっている	98/100 98	97/98 93	97/92 98	97/96 96	95/96 94

以下は、教職員のみに尋ねた回答結果を示す

12.生活を豊かにする手段として、情報端末機器を積極的に活用している	85/87	85
13.子どもたちが何を学び、何ができるようになったのかを評価し、授業改善につなげている	85/87	92
14.地域の学校園・施設、関係機関からの相談に丁寧に応えられている	77/74	78
15.組織的・効率的な業務の見直しに向けて、意見交換し合える風通しのよい職場である	81/81	85
16.ワーク・ライフバランスを意識できている	73/66	78

<項目1～11における分析結果>

**＊保護者および教職員からの肯定的回答の平均が高い項目について**

☞項目1について、学校教育目標である「児童生徒の願いを実現する」ことに深く関わっており、子どもたちに寄り添い、その言葉や反応をていねいに受け止める教職員の姿勢は、目標達成のために必要不可欠である。今後も、児童生徒一人ひとりの思いや願いに耳を傾け、しっかりと観察し、共感的な関わりを通して、安心して自己を表現できる環境づくりに努めてまいります。

☞項目2について、今年度より「地域協働プロジェクト」を発足し、地域の学校・園や施設等と連携しながら、子どもたちが多様な人々と関わる“学びの場”的拡充に取り組んでいる。「学校で学ぶ」と「地域で学ぶ」ことの相互作用を通じて、子どもたち一人ひとりの“できる姿”を引き出し、より豊かな学びにつなげていけるよう努めてまいります。

☞項目11について、すべての教育活動の根幹に関わる重要な視点であり、学校全体で継続的に取り組むべき課題である。担任を中心とした学年・学部の連携による日常的な指導・支援にていねいにあたることを基本とし、さらに養護教諭や看護師、スクールカウンセラー等の特別非常勤講師とも協働し、心理的な安心感を提供していくことも、子どもたちが自分らしく過ごしていく上で大切である。また、本校は現在校舎の工事が進行していることから、校内の安全点検や避難訓練の定期的な実施を通じて、物理的な安全確保にも重点を置きながら、子どもたちの安全意識の向上にもつなげていきたい。引き続き緊張感を持つつも温かみのある呉竹らしい支援体制で、安心・安全に学べる場の提供を続けてまいります。

**＊保護者および教職員からの肯定的回答の割合が、他項目と比較して相対的に低い項目について**

☞項目10について、今年度より「地域支援プロジェクト」を発足し、支援学校が担うセンター的機能である“育支援センター”的さらなる充実を目指し、支援部を中心に日々取り組んでいる。昨年度の“育支援センター”的活動では、地域の学校・園、障害のある子どもの保護者等からの教育相談・就学相談・進路相談が多く寄せられた。これらの相談対応を通じて、地域における支援のニーズの高さと、センター的機能の重要性を改めて認識しているところである。今年度は、こうしたニーズにより的確に応えるため、センター的機能の充実をさらに図るとともに、“育支援センター”的認知度向上にも力を入れており、その一環として、チラシを新たにリニューアルし、地域の学校・園、関係機関等へ配布するなど、情報発信の強化も進めている。今後も、地域との連携を深めながら、誰もが安心して相談できる“育支援センター”的構築を目指してまいります。

<項目12～16における分析結果（教職員のみ対象）>

□項目13について、他項目と比較して肯定的回答の割合が高かった。「ウェルビーイングな学校をめざして（2年次）」という研究テーマのもと、児童生徒の「やってみたい」「なんとかなる」「ありがとう」「自分らしく」といった姿を引き出すことを目指し、自由な発想による授業研究の成果が一定反映されたと考えられる。特に、教職員が深めたい授業内容や引き出したい児童生徒の姿について、共通の思いを持つ教職員同士でグループピングを行ったことで、主体的に意見交換しながら多様な研究実践につながっている。

今年度は、昨年度の成果を踏まえ、「やってみたい・なんとかなる・ありがとう・自分らしく」の4つの因子を授業の視点として取り入れることで、より魅力的な授業づくりと児童生徒のウェルビーイングな姿の実現につながるのではないかという仮説のもと継続的に取り組んでいる。また「幸せの道しるべ（MAP）※参考資料参照」を活用することで、教職員への意識づけを定着させ、様々な授業への般化も可能であると考えている。これらの取り組みが授業改善に反映できるよう、引き続き取り組んでまいります。

□項目16について、他項目と比較して肯定的回答の割合が低く、昨年度よりやや数値があがったものの依然として課題が残る。これは全国的にも共通する傾向であり、教員の長時間労働は喫緊の課題とされている。こうした状況を踏まえ、業務改善の推進や教職員体制の整備・充実を図りながら、「チーム学校」としての機能を高めていく必要がある。また、働き方の見直しと併せて、教職員一人ひとりが“働きがい”を感じられる職場づくりにも力を入れていかなければならない。特に、子育て世代の教職員も多く勤務しており、ライフスタイルに応じた柔軟な対応が求められる中、制度の活用も進んでいる。引き続き教職員が安心して働ける環境を整えるとともに、互いに支え合い、風通しの良い職場づくりを通して、一人ひとりのワークライフバランスの向上を目指してまいります。

## 6-2 実現度に関する分析結果 [児童生徒]

児童生徒へは、アンケートフォームもしくは紙媒体での回答を求めた。回答は「そう思う」「どちらともいえない」「そう思わない」の3段階から選ぶ形をとり、児童生徒の実態に応じて、本人による回答、担任による聞き取り等で回答を行っている。

表では、児童生徒のアンケート結果より、小学部・中学部・高等部の「そう思う」の回答を合わせた割合（%）を示す。

質問項目	児童生徒（全）
	上段が R6 前期/後期 下段が R7 前期
1.自分の心や体を大切にしている	68/80 83
2.友達と仲良く過ごせている	89/92 83
3.学校で「やってみたい」と思える活動がある	63/73 70
4.困った時など先生に相談している	70/81 81
5.こんな自分になりたいという願いや夢をもっている	66/69 63
6.学校で決まった役割がある	75/90 84
7.自分なりの方法でいさつができている	75/82 91
8.ルールや約束を守って行動できている	77/86 84
9.授業や活動の内容が理解できている	73/86 86

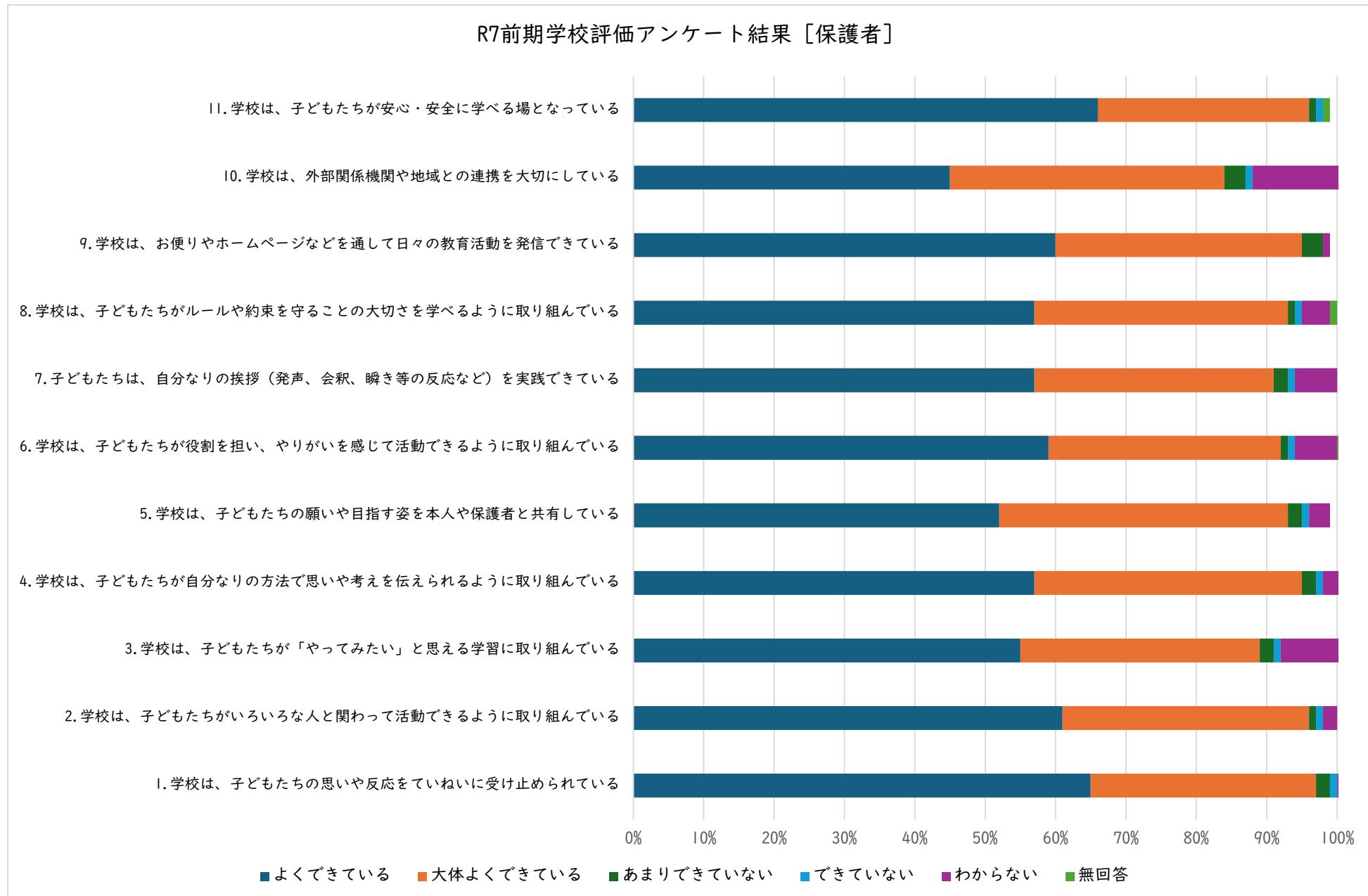
### <分析結果>

項目1や項目7では、前年度よりも肯定的な回答の割合が増加しており、児童生徒が自己を尊重し、社会的な関わりを意識して行動できている様子がうかがえ、日常的な言葉かけや生活指導の積み重ねが成果として表れているものと考えられる。

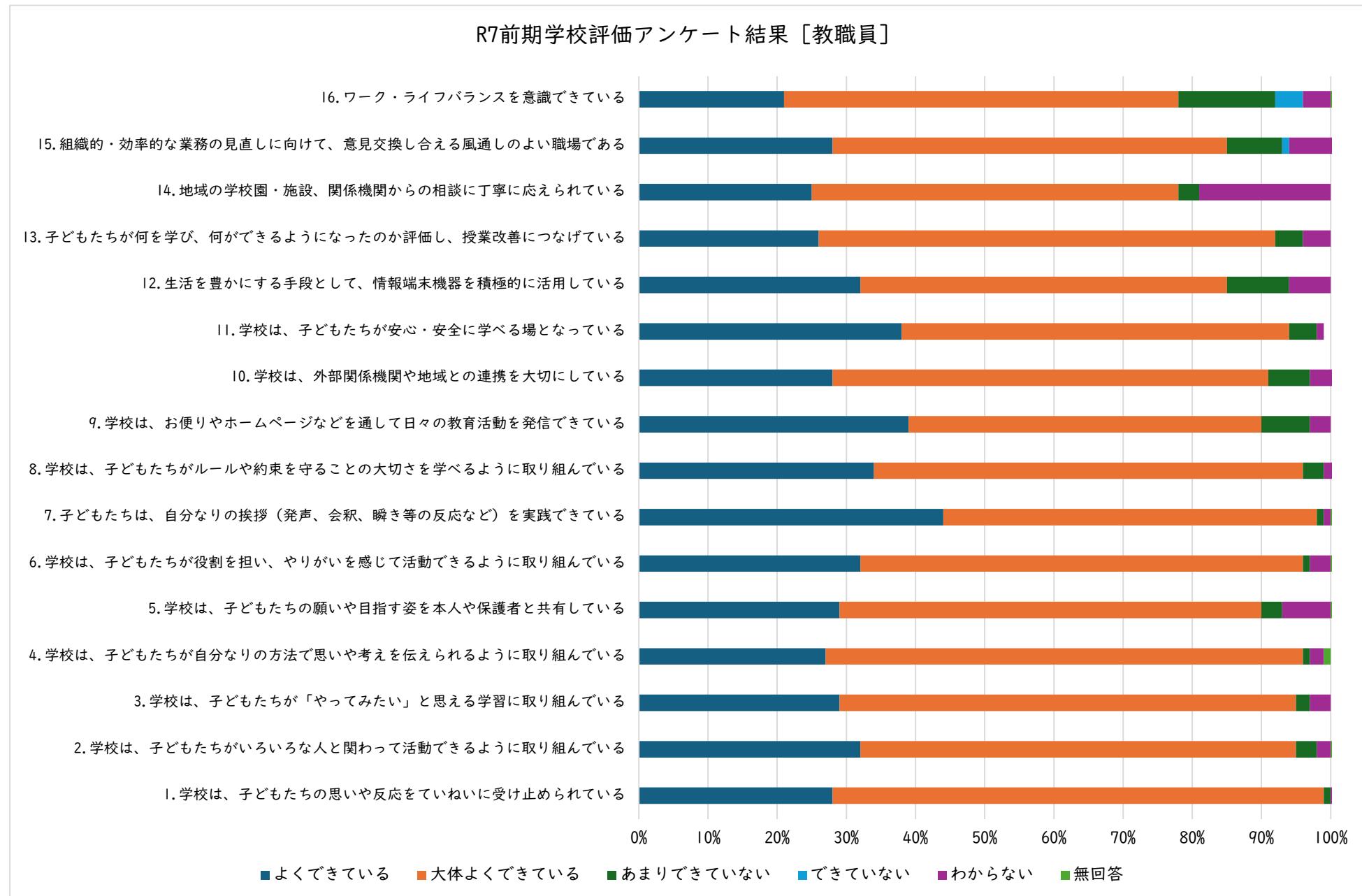
一方で、項目2や項目5では、前年度後期と比較してやや肯定的な回答が減少しており、人間関係の形成や自己の将来像に関する指導・支援については、後期に予定されている宿泊学習や修学旅行、学校祭「文化の部」などの学校行事、さらには卒業後の生活を見据えた見学や実習などを通して、継続的な取り組みが求められる。また、項目3や項目6では、児童生徒が主体的に学校生活に関わろうとする姿勢が一定程度見られてはいるが、引き続き高い実現度を目指して取り組んでいく必要が感じられる。

地域協働プロジェクトの発足や、研究にも関連した自由な発想での授業づくり等も通して、地域社会で自分らしく生きていける力を伸ばしていきたい。

## 7-1 実現度比較



## 7-1 実現度比較



## 7-1 実現度比較

